W-1-3　南琉球宮古語伊良部佐和田方言のアクセント体系の初期報告

五十嵐陽介
（国立国語研究所）

要旨　本稿は南琉球宮古語伊良部佐和田方言のアクセント体系に関する初期調査の結果を報告する。母語話者 1 名を対象とした本調査結果は、先行研究の記述とは異なり、佐和田方言は弁別的なアクセントを保持していること、アクセント型の区別は広範な環境で中和すること、極めて限られた環境において琉球祖語の 3 つのアクセント類がすべて区別されうることを示した。

1. はじめに

本稿は伊良部島（沖縄県宮古島市）の佐和田地区で用いられる宮古語（日琉語族・琉球語派・南琉球語群（Pellard 2015））の 1 方言である佐和田方言のアクセント体系に関する初期調査の結果を報告する。伊良部島は佐和田、長浜、国仲、伊良部、仲地、佐良浜の 6 地区に分けられる。6 地区で用いられる宮古語の変種は、下地（2018）によると音韻的な違いをもとに（1）の 4 方言に分類できる。

（1）　a. **佐和田・長浜方言**（佐和田・長浜地区）
　　b. 国仲方言（国仲地区）
　　c. 伊良部・仲地方言（伊良部・仲地地区）
　　d. 佐良浜方言（佐良浜地区）

佐良浜方言（1d）は、池間島からの移民によって形成された集落で話される言語変種であり、弁別的なアクセントを持つが、系統的には池間諸方言に属する（平山 1983）。（1）から佐良浜方言を除いた方言を本稿では伊良部諸方言と呼ぶ。平山（1983）によると、伊良部諸方言の中で弁別的なアクセントを持つ方言は国仲方言（1b）のみであり、佐和田方言を含むその他の伊良部諸方言はそれを持たない。

佐和田・長浜方言（1a）の韻律体系に関しては、下地（2018）による長浜地区の変種（長浜方言）の記述がある。それによると、長浜方言は弁別的なアクセントを持たないが、発話の韻律は規則によって記述可能であるという。佐和田地区と長浜地区の方言は、これまでの研究において同一の方言であるとみなされてきた。このことを考慮すると、佐和田方言も長浜方言と同様の韻律体系を持つことが期待される。しかしながら下地（2018）は、佐和田方言の韻律パターンは、長浜方言の分析に基づいて記述された規則によって予測できず、両方言の間には韻律に関して差異が観察される事実を指摘している。いずれにせよ、佐和田方言の韻律体系がいかなるものなのかを明らかにすることは、課題として残されたままである。

宮古語を含む南琉球語群の諸方言のアクセント型は広範な環境で中和するため、対立するアクセント型の数を同定すること自体が困難である（松森 2016; 五十嵐 2016）。佐和田方言のアクセント体系の包括的な記述は本稿の射程をはるかに超える。本稿の目的は、佐和田方言に弁別的なアクセントはあるか否か、あるとしたら何種類のアクセント型が対立するかを明らかにすることにとどまる。

2. 手法

調査は 2018 年 8 月 16 日、9 月 3 日、2019 年 8 月 26 日に一橋大学国立キャンパスで行われた。調査協力者は 1936 年生まれの伊良部島佐和田地区出身の男性 1 名であった。佐和田地区の居住暦は 0 歳か

ら 15 歳までである。録音した語数は異なり語数で 400 語弱であるが、本稿ではアクセント型の対立が確認できた環境で録音された語のみを分析対象とした。その調査語は表 2 に示す 2 モーラ名詞 36 語、3 モーラ名詞 15 語、計 51 語であった（表記は音素表記（/c/ [ts], /r/ [ɾ ~ l]））。調査過程において代名詞のアクセント型が安定することが示唆されていたため、代名詞の数が多い。調査語は（2）のフレームに入れて発音してもらった。

（2）調査フレーム（環境）（X は調査語を表す）

a. **X=nkai fii-tar munu**（X=向格 与える-過去 もの）「X に与えたもの」

b. **X=nkai=du par-ii njaan.**（X=向格=焦点 去る-接続 完了）「X へ去ってしまった。」

c. **X=kara cifi-tar panasi**（X=奪格 聞く-過去 話）「X から聞いた話」

d. **X=kara=du cifi-tar.** （X=奪格=焦点 聞く-過去）「X から聞いた。」

e. **X=kara=mai cifi-tar panasi.** （X=奪格=累加 聞く-過去 話）「X からも聞いた話」

f. **X=nu/ga jaa**（X=属格 家）「X の家」

g. **X=nu/ga=du mii-n.**（X=主格=焦点 見る-否定）「X がいない。」

3. 結果

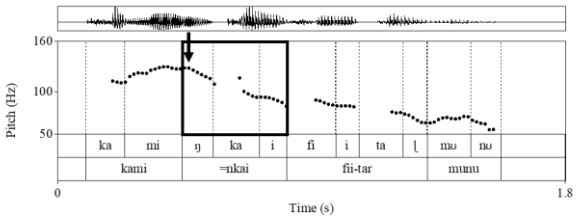
調査結果は、先行研究の記述とは異なり、佐和田方言は弁別的なアクセントを持つことを示した。他の宮古語諸方言（松森 2016; 五十嵐 2016）と同様に、佐和田方言のアクセント型は、単独発話を含めた広範な環境で中和した。さらに、対立が現れる環境においてさえ名詞の音調型には揺れが見られることがあった。対立の確認された環境における音調型は表 1 の通りであった。

表 1　環境（2）における音調型（“˹”はピッチの上がり目“˺”はピッチの下がり目を、μ はモーラを表す。

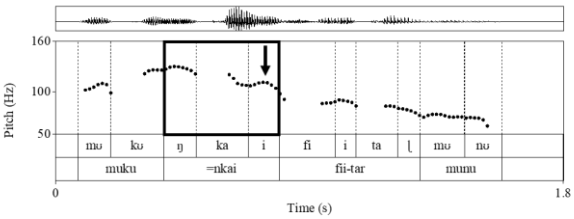
環境（2a）	**X=nkai fii-tar munu** 「X に与えた物」	2 モーラ語	L 型	μ˹μ n˺ ka i	（図 1a）
			H 型	μ˹μ n ka i˺	（図 1b）
		3 モーラ語	H 型	μ˹μ˺ μ n ˹ka i	（図 1c）
環境（2b）	**X=nkai=du par-i-i njaa-n.** 「X へ去ってしまった。」	2 モーラ語	L 型	μ˹μ n˺ ka i du	
			L 型	μ˹μ n ka i du˺ ~ μ˹μ n ka i˺ du	
		3 モーラ語	H 型	μ˹μ] μ n˹ka i˺ du	
環境（2c）	**X=kara cifi-tar panasi** 「X から聞いた話」	2 モーラ語	L 型	μ˹μ˺ ka ra	
			H 型	μ˹μ ka˺ ra	
		3 モーラ語	H 型	μ˹μ μ ka˺ ra	
環境（2d）	**X=kara=du cifi-tar.** 「X から聞いた。」	2 モーラ語	L 型	μ˹μ˺ka ra du	
			H 型	μ˹μ ka ra˺du	
		3 モーラ語	H 型	μ˹μ μ ka ra˺du	
環境（2e）	**X=kara=mai cifi-tar panasi** 「X からも聞いた話」	2 モーラ語	L 型	μ˹μ˺ka ra˹ma˺i	（図 2a）
			H 型	μ˹μ ka ra˺ma i	（図 2b）
		3 モーラ語	H 型	μ˹μ μ ka ra˺ma i	（図 2c）
環境（2f）	**X=nu/ga jaa** 「X の家」	2 モーラ語	H 型	μ˹μ nu˺	
		3 モーラ語	F 型	μ˹μ˺ μ nu	
			L 型	μ˹μ μ˺nu	
環境（2g）	**X=nu/ga=du mii-n.** 「X がいない。」	2 モーラ語	L 型	μ˹μ˺nu du	（図 3a）
			H 型	μ˹μ nu˺du	（図 3b）
		3 モーラ語	F 型	μ˹μ˺μ nu du	（図 3c）
			L 型	μ˹μ μ˺nu du	（図 3d）
			H 型	μ˹μ μ nu˺du	（図 3e）

環境（2a-e）では、2 モーラ語には 2 種類、3 モーラ語には 1 種類の音調型が観察された。以降、名詞の直後の助詞の第 1 母音が低ピッチとなり、その母音を含むモーラの直前のモーラが高ピッチとなる型を「L 型」と呼び、助詞の第 1 母音が高ピッチとなる型を H 型と呼ぶ。

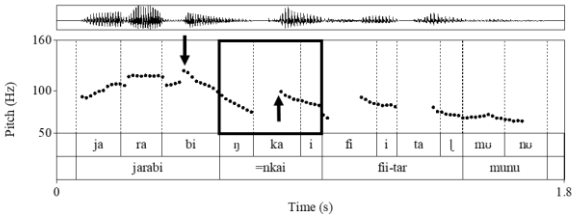
一方、環境（2f）では、2 モーラ語には 1 種類、3 モーラ語には 2 種類の音調型が観察された。3 モーラ語に現れる 2 つの型は、助詞が低ピッチとなる点では共通しているが、一方は助詞の直前のモーラが低ピッチとなるのに対して、他方は助詞の直前のモーラが高ピッチとなる点で異なる。以降、前者を F 型と呼び、後者の L 型と区別する。



(a) 2 モーラ L 型 kami「亀」

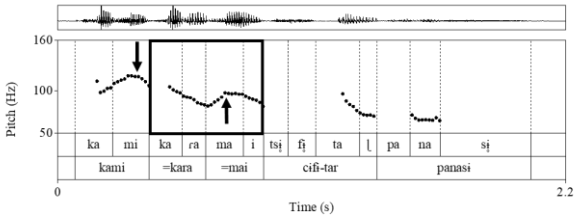


(b) 2 モーラ H 型 muku「婿」

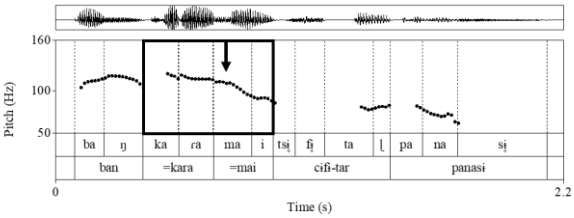


(c) 3 モーラ H 型 jarabi「子供」

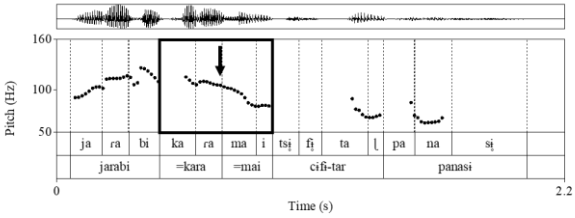
図 1 環境（2a）で発話された名詞の音声波形と基本周波数（F0）曲線．縦の点線はモーラ境界、太線は助詞の区間を表し、“↓”は急激な下降が、“↑”は急激な上昇が開始される時点を表す（以下同）。



(a) 2 モーラ L 型 kami「亀」

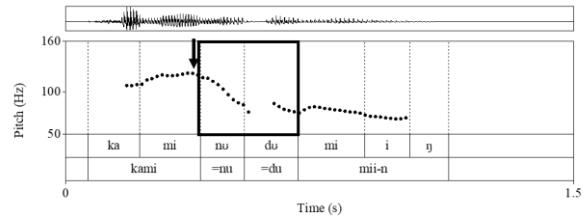


(b) 2 モーラ H 型 ban「私」

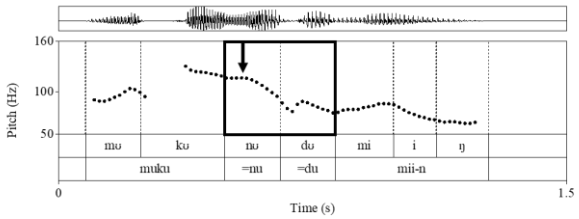


(c) 3 モーラ H 型 jarabi「子供」

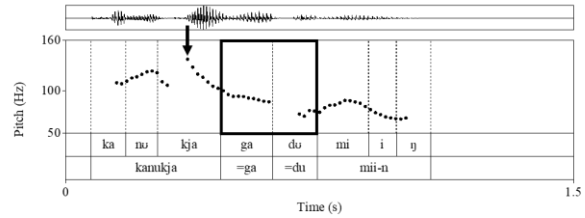
図 2 環境（2e）で発話された名詞の音声波形と基本周波数（F0）曲線.



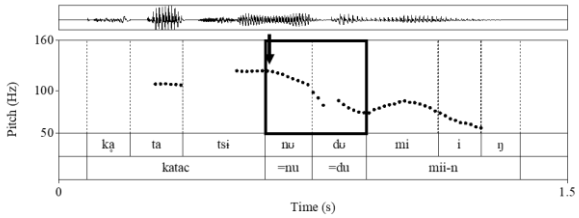
(a) 2 モーラ L 型 kami「亀」



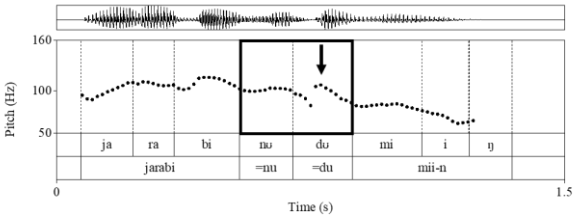
(b) 2 モーラ H 型 muku「婿」



(c) 3 モーラ F 型 kanukja「彼ら」



(d) 3 モーラ L 型 kataci̇「敵」



(e) 3 モーラ H 型 jarabi「子供」

図 3 環境（2g）で発話された名詞の音声波形と基本周波数（F0）曲線.

最後に環境（2g）では、2 モーラ語には 2 種類、3 モーラ語には 3 種類の音調型が観察された。この環境は、これまでに分かっている限り、3 種類の音調型が観察される唯一の環境である。

4. 考察

佐和田方言は、2 モーラ名詞には 2 種類の、3 モーラ名詞には 3 種類のアクセント型が対立する弁別的なアクセントを有することが示唆された。しかしピッチのみが異なるミニマルペアは見つかっていない。観察された複数の音調型が 1 つのアクセント型の異音に過ぎない可能性を否定するためには、独立の証拠が必要となる。その証拠の 1 つとなるのは、佐和田方言に観察される音調型と、他の琉球諸語方言におけるアクセント型との規則的な対応である。琉球祖語には 3 つのアクセント類（A 類、B 類、C 類）が再建される（松森 2012）。このアクセント類と佐和田方言の音調型の対応を表 2 に示す。（再建された類の検証については五十嵐（2019）参照。）音調型とアクセント類とがほぼ規則的に対応していることから、観察された音調型を弁別的なアクセント型の実現とみなすことができる。

2 モーラ名詞に関しては環境（2f）を除いて C 類が他の類から区別される。3 モーラ名詞に関しては環境（2f）では A 類が他の類から区別され、環境（2g）では A 類、B 類、C 類が互いに区別される。この対応は表 3 の形に要約できる。以上から、佐和田方言の音調型は琉球祖語における区別の反映とみなすことができる。

表 2 個々の調査語の音調型の分布とアクセント類との対応．※1 ba「ga」 ※2 ba「gadu」

	モーラ数	類	語形	意味	(2a)	(2b)	(2c)	(2d)	(2e)	(2f)	(2g)
1		A	butu	夫	L		L	H	L	H	L
2		A	tuz	妻	L		L	L	L	H	L
3		A	pstu	人	L		L	L	L	H	L
4		A	ffa	子	L		L	L	L	H	L
5		A	usɨ	牛	L		L	L	L	H	L
6		A	ir	西	L	L					
7		A	sɨta	下	L	L					
8		A	tibi	後ろ	L	L					
9		A	tin	空	L	L					
10		A	kaa	井戸	L	L					
11		A	vva	お前	L		L	L	L	H	L
12		A	ui	その人	L		L	L	L	H	L
13		A	kui	この人	L		L	L	L	H	L
14		A	kari	あの人	L		L	L	L	H	L
15		B	kam	神	L		L	L	L	H	L
16		B	in	犬	L		L	L	L	H	L
17		B	kami	神	L		L	L	L	H	L
18		B	maju	猫	L		L	L	L	H	L
19	2	B	sɨma	島	L	L					
20		B	jaa	家	L	L					
21		B	jama	山	H	L					
22		C	muku	婿	H		H	H	L	H	H
23		C	agu	同級生	H		L	H	L	H	L
24		B/C	uja	父・親	H		L	H	L	H	L
25		C	zza	父	H		L	H	L	H	L
26		A/C	dusɨ	友	H		H	H	H	H	L
27		C	naka	中	H	H					
28		C	mai	前	H	H					
29		C	fɨr	便所	H	H					
30		C	pama	浜	L	L					
31		C	im	海	L	L					
32		C	duu	自分達	H		H	H	H	H	H
33		C	ban	私	H		H	H	H	※1	※2
34		C	kuma	ここ	H	H					
35		C	uma	そこ	H	H					
36		C	kama	あそこ	H	H					
37		A	bikir	男兄弟	H		H	L	H	F	H
38		A	bunar	女兄弟	H		H	H	H	F	F
39		A	vvadu	お前達	H		H	H	H	F	F
40		A?	kunukja	この人達	H			H	H	F	F
41		A?	unukja	その人達	H			H	H	F	
42		A?	kanukja	あの人達	H		H	H	H	F	F
43		B	midum	女	H		H	H	H	F	L
44	3	B	putuki	仏	H		H	H	H	L	L
45		B	kataci	敵	H		H	H	H	L	L
46		B	uttu	妹・弟	H		H	H	H	L	L
47		B/C	icifɨ	従兄弟	H		H	H	H	L	H
48		C	jarabi	子供	H		H	H	H	L	H
49		C	mmaga	孫	H		H	H	H	F	H
50		C	anna	母	H		H	H	H	L	H
51		C	banti	私達	H		H	H	H	L	L

表 3 佐和田方言の音調型と琉球祖語のアクセント類との対応.

<table>
<tr><th></th><th></th><th>環境（2a-d）</th><th>環境（2f）</th><th>環境（2g）</th></tr>
<tr><td rowspan="3">2 モーラ</td><td>A 類</td><td rowspan="2">L 型</td><td rowspan="3">H 型</td><td rowspan="2">L 型</td></tr>
<tr><td>B 類</td></tr>
<tr><td>C 類</td><td>H 型</td><td>L 型?　H 型?</td></tr>
<tr><td rowspan="3">3 モーラ</td><td>A 類</td><td rowspan="3">H 型</td><td>F 型</td><td>F 型</td></tr>
<tr><td>B 類</td><td rowspan="2">L 型</td><td>L 型</td></tr>
<tr><td>C 類</td><td>H 型</td></tr>
</table>

5. 結論

本稿は佐和田方言のアクセント体系に関する初期調査の結果を報告した。調査結果は、1）先行研究の記述とは異なり、佐和田方言は弁別的なアクセントを保持していること、2）他の宮古語諸方言と同様にアクセント型が広範な環境で中和すること、3）アクセント型の対立が現れる環境のほとんどでは、琉球祖語の 3 つのアクセント類（A 類 B 類 C 類）のうち C 類が A 類・B 類から区別されること、4）3 モーラ名詞は極めて限られた環境において 3 種類の類がすべて区別されうることを示した。佐和田方言は、2 モーラ名詞については 2 種類の、3 モーラ名詞については 3 種類のアクセント型が対立する三型アクセント体系（上野 1984）を有すると言える。

本稿の調査協力者は 1 名であり、また分析した名詞の語数も決して多くない。特に 3 モーラ名詞のデータが少ないので、3 モーラ名詞に関する考察は信頼性の高いものではない。佐和田方言が少なくとも 2 種類のアクセントが対立する体系を持つとする結論は動かないと思われるが、同方言が三型アクセント体系を持つことをより強固な証拠に基づいて主張するのは今後の課題となる。

謝辞　調査に協力してくださった伊良部島出身の S 様に厚く御礼申し上げます。本研究は JSPS 科研費 17H02332, 19H00530, 16H01933, 16H03421 および国立国語研究所共同プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」の助成を受けたものです。

引用文献

五十嵐陽介（2016）「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150, 1–15.

五十嵐陽介（2019）「琉球宮古語伊良部佐和田方言のアクセント体系は三型あるいは二型であって一型ではない」令和元年夏期終日ゼミ発表原稿（9 月 6 日, 一橋大学）.

上野善道（1984）「N 型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会(編)『現代方言学の課題 2：記述的研究篇』167–209. 明治書院.

平山輝男（1983）『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社.

松森晶子（2012）「琉球語調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16(1), 30–40.

松森晶子（2016）「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み―その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件―」『言語研究』150, 59–85.

下地理則（2018）『南琉球宮古語伊良部方言』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所.

Pellard, Thomas (2015) The linguistic archeology of the Ryukyu Island. In: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan Languages: History, Structure, and Use,* 14–37. Berlin: DeGruyter Mouton.